体育科教育学における授業評価の方法論に関する研究

－より実用的な授業評価を実現していくための提案－

スポーツ文化研究領域
5007A064-9　望月敦夫　　研究指導教員：　友添秀則教授

【本研究の目的・方法】

本研究では、体育科において児童・生徒による授業評価の方法がどのように検討されてきたのかについて、これらの授業評価法の変遷を明らかにすることを第１の目的とする。また、高橋らによって確立された授業評価法からもたらされた成果と課題について明らかにすることを第 2 の目的とする。さらに、そこで明らかになった課題を解決し、より実用的な授業評価を実現していくための提案をすることを第３の目的とする。また本研究は、国内を対象とした体育科の授業評価に関する文献を収集し、分析、考察を進めていく。特に、体育授業の授業分析における授業評価法の取り組みに関する先行研究を検討する。

【各章の概要】

＜第１章＞

第１章では、体育授業評価の方法論の変遷を中心に検討した。ブルームの理論の１つである、診断的評価、形成的評価、総括的評価は、それぞれ学習評価における評価形態のとらえ方であるが、体育分野における授業評価においても同様なとらえ方がなされるようになる。その先駆的な研究は小林によって行われ、20 年以上の歴史を持っている。小林は子どもの眼を通して体育授業をみた場合、「喜び」、「評価」、「価値」の 3 つの観点から理解されることを明らかにし、これにもとづいて「体育授業診断法（態度評価尺度）」を開発した。また、梅野・辻野や奥村らは小林式診断法にもとづきながら、小学校低・中学年の児童を対象に再検討している。高橋らは小林式の評価法の意義を認めつつも、その評価項目が古い体育観（運動による教育）に依拠していることを問題にし、現在広く支持されている体育観（運動の教育）にたって、中学生を対象に「子どもからみた体育の授業構造」を分析した。その結果、子どもは体育授業を①「楽しさ（情意目標）」、②「成果（認識＋技能目標）」③「仲間（社会的行動目標）」④「先生（教師行動）」の 4 つの観点から評価することを明らかにした。このような評価観点は、近年、クルムやシーデントップら国際的な研究者によって主張されている体育目標や学習領域の構造にうまく対応しており、また、わが国の学習指導要領の目標の考え方とも基本的に一致するため、有効な評価法になると考えられる。以上述べてきたことは、体育分野における診断的・総括的な評価法に関する変遷の総括である。また、形成的授業評価についても同様な変遷をたどっている。

＜第 2 章＞

第 2 章では、高橋らによって確立された授業評価法からもたらされた成果と課題について検討した。高橋らによって開発された授業評価の調査票は、いわゆる「良い体育授業」を概括的に指向されたものであり、幅広い授業に適用することが可能だといえる。しかし一方で、特定の目標や運動を対象とした場合には、その評価が荒削りなものにならざるを得ない。このような背景から、特定の目標や運動を対象とした授業評価法の開発が試みられている。代表的な例として、松本や小松崎、日野らの研究を本論では取り上げた。

また、高橋らによって開発された授業評価の調査票を用い、子どもの評価する「良い体育授業」の過程に現れる行動的特徴を明らかにしようとする試みについて取り上げ、先行研究の成果から、子どもの評価する「良い体育授業」の条件は、授業の勢い（授業のマネジメントと学習の規律）、授業の雰囲気（教師と子どもの肯定的な相互作用、子ども同士の肯定的な相互作用）、子どもの主体的学習の３点にまとめることができる。これらは、授業で採用される目標、内容、方法に関係なく、全ての授業に求められる「基礎的条件」であると考えられる。

さらに、体育授業に関する専門誌「体育科教育」に掲載された授業実践における授業評価法の取り組みについて検討した。分析の結果、高橋らの開発した授業評価法は、授業全体の成否を確認するためには便利な評価法であるといえる。しかし、授業改善に向けての具体的な情報までは得られないのではないかと考える。これは、この評価法が量的な評価法であるという限界ではないだろうか。つまり、量的な評価法では、改善すべき部分（意欲・関心、成果、学び方、協力）はわかるだろう。そして、問題があった部分に対して改善することもできる。しかし、授業改善のための具体的な方策が立てることができるだけの有効な情報は得られない。この問題を打開するには、質的なデータに注目しなければならないと考える。

＜第 3 章＞

第 3 章では、より実用的な授業評価を実現していくための提案として、質的な分析によって子どもを捉え、それを授業改善に生かすことができないか具体的方法を検討した。質的な授業評価法に関する先行研究は皆無である。そこで、質的な授業研究の方法論を参考にできないか検討した。個人に焦点を当てたナラティブ分析では、具体的な状況から授業を省察している点で1つの成果だといえる。しかし、分析をする人によって質的なデータがいかようにも解釈されてしまう可能性を指摘しておかなければならない。このような質的な授業研究法方法が授業評価法に応用できるかと考えたとき、これらの方法論をそのまま適応するのは難しいのではないかと考えた。

そこで、子どもによる授業の感想文に着目し、感想文を授業評価法に適応できないか考察した。まず、感想文が実践でどのように取り扱われているのか、専門誌「体育科教育」に掲載された事例について授業評価法に活用できる点はないか検討した。また、現職の教師へのインタビュー調査から得られた情報から、質的なアプローチによる授業評価法への示唆を得ようと検討した。感想文を書かせる方法として大きく分けて、自由記述と視点を定めて書かせる方法の 2 種類があるといえる。自由記述をどのように読み取るかという視点は、全体的に肯定的なのか否定的なのか、運動の技術・戦術的なポイントについて、仲間との関わりについて、自分の考えたこと、意識したこと、がんばる姿などについて、この 4 つが主な視点となる。一方で、視点を定めて感想を書かせる方法では、読み取る視点も設定する視点に対応することになる。

＜結章＞

結論として、授業評価においてより有効な情報を得るためには、量的な方法による意義を認めつつ自由記述による感想文を併用し、授業評価法として用いることが重要ではないかと考える。

また、より実用的な授業評価法を開発するためには、実際の授業を対象に、これまでの量的な授業評価法によって得られた結果と、自由記述による感想文を教師がどのように読み取っているのかという質的なアプローチによる授業評価法をすり合わせていく実証的研究を進めることが今後の課題となるだろう。